Junko higasa

寒月君のヴァイオリン

『吾輩は猫である』第七章で「運動」が政治活動の一面を持つという話を聞いた。大っぴらな政治活動が政府によって抑制されると、今度は運動会という名目で集会が開かれ、それが難しくなるとヴァイオリンが政治的主張の手段として使われたという。それを聞いたとき私は「寒月君が弾くヴァイオリン」を思い浮かべた。

この小説は殆ど寺田寅彦の生活そのものといっても過言でないくらい、彼の日常が反映されている。物理学者・寺田寅彦は、今の世の中で正に起こっている問題に深く関わる原子・宇宙・地質(地震)について研究していたが、音響研究は生涯のテーマであった。寅彦は独学・自己流でヴァイオリンの稽古をしていた。

さて『猫』の中で、寒月君がヴァイオリンを買って演奏するのに苦心する場面が出てくる。ヴァイオリンを買おうと思い立って何度も店の下見をし、周囲の住民に見つからないように密やかに購入し、山の中で辺りを気にしながらようやく弾くが、夜の闇の中に潜む何者かを畏れてあわててやめる場面である。これは実際に寺田寅彦が楽譜を求めて銀座へ行ったが、その気位の高さから音楽関係者には良い印象を受けず、わざわざ「横浜のドーリングとかいう商会に手紙を出して注文した」話が彼の随筆中にある。それが背景として応用されているようだ。しかしそこで漱石は何を表現したか？ヴァイオリンを買う―即ち政治的主張（間接的政治活動）をする。それには周囲住民の睨み（国家への告発）を避けなければならない。そして何とか実行に移す―しかし闇の中で目が光る―怖くなってやめる―という構図に見える。即ち『猫』の中に政治批判を込める。それは明らかなる政治批判だと断定されないように用意周到に行う必要がある。危険が迫ったらやめる。そういう構図のように思える。

また寒月君のヴァイオリンが5 円20 銭というところ。独学で稽古する寺田寅彦のヴァイオリンは9円であった。プロの楽器とは程遠い。感動を受ける演奏になかなか出会えなかった寅彦であったが、ある日の音楽会でケーベルさんのピアノ独奏に感動した。そこでケーベルさんに「理科の学生だが、ヴァイオリンの稽古をしている」という手紙を出して面会を求めた。白山御殿町の西洋館を訪ねたのは23 歳の時。その面会の中でケーベルさんに「使っているヴァイオリンの値段はいくらか？」と尋ねられて「9円」と答えて笑われたが「良い思い出だ」という話が、やはり寅彦の随筆中にある。

ここで漱石は何故「9 円」を「5 円20 銭」に置き換えたか？それは漱石の『猫』の原稿料がその金額であったからではないだろうか。即ち演奏家の腕とは別に楽器の値段が音色に反映すると同様に、漱石の政治主張は「5 円20 銭の価値」としての評価しかされないよ、という皮肉をユーモアとして表現したのではないだろうか？独学の楽器はプロの政治家の楽器とは比べものにはならない。けれど自分はこの楽器で、世の中を感動させる演奏をしてみせる。そういう思いがあったのではないだろうか？

苦沙弥先生の住まいは「臥龍窟」である。「臥龍窟」とはこれから世に出る大物が力を蓄えて控えている場所である。『猫』で満を持して一気に世間の天空めがけて飛び立った漱石は、これからその飛翔で世間を圧倒しようとしている。自分の考えがどこまで未来の青年に通じるか？それは「人間・漱石」の挑戦であったろう。(2012.4.4)